

医療福祉コミュニケーションにおける表情の重要性について (1)

- 表情認知における文脈の重要性に関する検討 -

新潟医療福祉大学医療情報管理学科・高橋直樹

【背景】

筆者はこれまで、表情の表出と認知に関する研究をおこなってきた。それらの研究は主に、研究対象者に対して、特定の感情を表出させ、表出された表情を分析し、感情と表情の関連と体系を探索する研究（表出研究）か、特定の表情の動画もしくは静止画から感情を読み取らせ、人間の表情認知構造を探索する研究（認知研究）が中心であった。しかしながら、人間は、特定の感情に対して一義的な表情を表出するわけではなく、また特定の表情に対して一義的な感情を読み取るわけでもない。たとえば、「幸福の表情を表出してください」と言われた時に、必ずしも「笑顔」を表出する必然性はなく、相手の「笑顔」から必ずしも「幸福」を読み取る必然性もないわけである。つまり、それらは「文脈」という、その感情や表情に至る過程、場の空気、相手の性格などを考慮する必要性があり、人間は無意識的にそのような処理をおこなっていると推察される。しかし、従来の心理学的表情研究においては、高橋ら（2002, 2007）の研究のように、若干文脈を変数に入れたものも見受けられるが、実験調査上の困難さからか、人間の表情表出と表情認知における文脈の効果を明確に結論付けるような成果はまだ今後の課題であるように思われる。

人間の表情表出と表情認知における文脈の重要性は、主にリアルな対人コミュニケーションの場において経験するものであるが、映画やドラマなどにおける優れた役者の微妙な表情やしぐさにも、演じられた登場人物の過去から現在を経て未来に至る文脈が包含されており、解釈に深みを持たせることがある。特に、表情の表出と認知における文脈の重要性を認識させられる映画としてはチャップリンの「街の灯（1931）」が挙げられる。この映画の詳しいあらすじは割愛させて頂くので、興味のある方には是非とも鑑賞して頂きたいが、ラストシーンにおけるチャップリンの表情は、ある種のカテゴリに属する特定の感情を表出したものではなく、また特定の感情をラベリングできるものでもないと思う。それと同時に、この映画自体がハッピーエンドなのか、それともアンハッピーエンドなのかといった映画そのものに対する解釈も、この表情に対する解釈とともに、映画評論家の間でも非常に意見が分かれている。しかし、どんなに優秀な表情研究者であれ、この映画のラストシーンにおけるチャップリンの表情だけを見て正確な分析をおこなうことは不可能であろう。つまり、ラストシーンに至る約90分の過程（つまり文脈）を経て初めて、その表情の意味が理解できるのである。

【方法・結果・考察】

4年制大学の1年生342名（年齢は主に18歳か19歳）に、チャップリンの「街の灯」を鑑賞させて、「ハッピーエンド」か「ハッピーエンドではない」か「その他」を選択させた。また、それぞれの選択肢を回答した理由と、ラストシーンにおける主人公の表情にはどのような感情が表現されているかについて、自由記述で回答させた。

その結果、「ハッピーエンドだと思う」と回答した学生が271名（79%）、「ハッピーエンドではないと思う」と回答した学生が44名（13%）、「その他」が28名（8%）であった（図1）。それぞれの選択肢を回答した理由（自由記述）に関する分析は今後の報告とするが、主に、ハッピーエンドと回答した学生は主人公が笑顔であることから主人公の幸福を認識していたのに対し、ハッピーエンドではないと回答した学生は文脈（映画のあらすじ）を踏まえた上で主人公の不自然な笑顔を認識していた。一方、他の機会（看護師の実習指導者研修会）では、成人の受講生（現役の看護師）に対して、この映画のあらすじを口頭で説明した上で、ラストシーンの表情について挙手で尋ねたところ、「ハッピーエンドではないと思う」と回答した人が圧倒的に多く、統計学的な実証は得られていないものの、人生経験を積みながら、人間の本音と建前を文脈と表情から識別する能力が（生得的なものに加えて）学習されるのではないかと推測される。

何故、人によって解釈の違いが出てくるのか、また、どのようにして、人が表情の表出や認知のスキルを獲得していくのかを探索していくことが、社会心理学や感情心理学の研究テーマの一つである。そして、これらのテーマに取り組むためには、言うまでもなく、パーソナリティ、年齢、性別などの個人差を考慮しなければならないが、研究手法として、特定の表情に対して特定の感情をラベリングする一義的な手法だけではなく、必然的に「文脈」という要素は避けて通れないのではないかと思うのである。

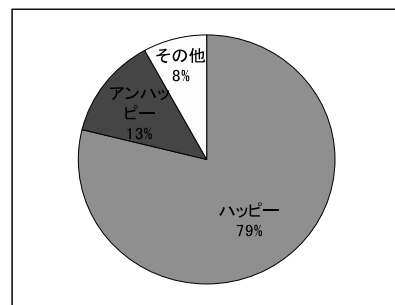


図1. 映画「街の灯」を用いた表情認知実験の結果

【文献】

- 1) 高橋直樹・大坊郁夫（2002）幸福の表情表出における多様性と他者の存在の効果，日本顔学会誌，2，1，71-81.
- 2) 高橋直樹・大坊郁夫・趙鏞珍（2007）感情教示法を用いた幸福と怒りの表情表出における日韓比較，対人社会心理学研究，7，61-65.